

司式 熊田雄二牧師
奏楽 浅池慶子姉妹

前 奏
開 会 招 詞

* 賛 美 歌 35 : 1 十字架の上に

十字架の上に屠られたまいし こよなくきよき み神の子羊
わがため悩みをしのびたまいし み恵み げにも尊し アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書3 罪の告白②

主なる神よ、あなたの御前に背きの罪を告白します。わたしは聖なる戒めに従わず、失われた羊のように迷い出て、思いと言葉と行いにおいて罪を犯しました。しなければならないことをせず、してはならないことをして、自分の身に、あなたの怒りと裁きを招きました。憐れみに富んでおられる父よ、罪と過ちを悲しむわたしに憐れみを注いでください。神の独り子である救い主の名によって、わたしを赦してください。聖霊の恵みによって、わたしを新しく生まれ変わらせてください。願わくは今から後、み栄えのために生きる者とならせてください。

主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編32、イザヤ53、ローマ7)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

- あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
- 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- あなたの父と母を敬え。
- あなたは殺してはならない。
- あなたは姦淫してはならない。
- あなたは盗んではならない。
- あなたは隣人について偽証してはならない。
- あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 35 : 2 十字架の上に

十字架の上に屠られたまいし こよなくきよき み神の子羊
み救いあらずば 罪のこの身は 滅びをいかでまぬがれん アーメン

公 同 の 祈 禱 祈 禱 書 1 4 復 活 節 第 一 主 日 受 難 週

恵み深い父なる神さま、御子イエス・キリストは、救いの約束を実現させるため、ろばの子に乗って、エルサレムに入られました。十字架に向かって行かれた主は、わたしたちが会う全ての試練を受け、しかも罪はなく、試練と誘惑に勝利されました。

それゆえ、主は、わたしたちを、あらゆる試練の中で助けることができ、神に従う力を与えてくださることを信じます。(マタイ21、ヘブライ2、ゼカリヤ9)

献 金 (黒)教会活動 (赤)大会メディアミニストリー 70
今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

聖 書 朗 読 ルカによる福音書6章12-19節(新約聖書112頁)

説 教 「十二使徒の使命」 熊田牧師

祈 禱

* 賛 美 歌 35:3 十字架の上に
十字架の上に屠られたまいし こよなつきよき み神の子羊
ともしくかよわき我をあわれみ 安きを常にたまえや アーメン

* 主 の 祈 り 祈 禱 書 1

天にましますわれらの父よ
願わくは御名をあげさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今度も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 67主イエスの恵みよ
主イエスの恵みよ 父の愛よ 御霊の力よ ああ み栄えよ アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告

雨宮信長老

I 十二使徒の選び

きょうはキリストが十二使徒をお選びになった箇所です。十二使徒を選ぶために、まず、お祈りをなさいました。12節に「神に祈って夜を明かされた」とあります。それほど重要なことを決める祈りでした。キリストは神の御子ですから、それほど祈らなくても決めることができになりそうですが、実にこれが人となられたことの意味なのです。神の御子は神ですから、祈りを受けるお方ですが、祈るお方になられました。神の御子が一人の人イエスとなられたので、重要なことを決めるのに徹夜でお祈りなさいました。

そのことをヘブライ人への手紙がこう言っています。「それで、イエスは神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、御自身、試練を受けて苦しめられたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです。」(2:17.18)。また、こうも言っています。「キリストは肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。」(5:7.8)

十二使徒を決める際、「後に裏切り者となったイスカリオテのユダ」が含まれていません。ユダが裏切った時、こんなはずではなかったと、主イエスは思われたのでしょうか。想定外だったのでしょうか。実にここに、イエス様はやはり神であることの意味が表されています。それは、キリストが十字架に架けられることは、裏切り者や敵対者に主導権があったのではなく、キリスト御自身に主導権があったことです。主イエスは御自分から十字架に架かりに行かれました。だから想定内なのです。

しかし、このことは簡単ではありませんでした。「激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ」るほどのことでした。メシアが苦しみを受けることは、預言どおりでしたが、預言の成就是簡単なことではありませんでした。「捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた」ことは、簡単ではありませんでした。(イザヤ53:8)

II 12の意味

主イエスは、徹夜祈禱のあと、「朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名付けられた」ので(13節)、始めから12人を呼び寄せたというマタイ福音書と違います(10:1)。マルコ福音書は微妙です。「イエスが山に登って、これと**思う人々**を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。そこで12人を任命し、使徒と名付けられた」(3:13.14)。「これと**思う人々**」は12人だけか、他の弟子たちも含んでいるか、はつきりしません。

はつきりしないことは詮索しない方がいいのですが、しかし、こういう違いが、証言者が複数いることを表わしています。全部同じだったら、元の証言者は一人だけという可能性があります。それでは証人の証言は本当かどうか分かりません。イエスがキリストであることの証言者は複数いるのです。

証言者が12人いることの大切さは、ルカ文書第二巻の『使徒言行録』から確認できます。ユダが裏切ったので、十二使徒は一人欠けて11使徒となりました。そこで一人補充されることになりました。補充するに当たって、ペトロが条件を言いました。「主イエスが私たちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、私たちを離

れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、私たちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」(1:21.22)

そうして一人加わって、再び十二使徒となりましたが、なぜ12人なのでしょう？それは、主イエスの言葉から確認できます。同じ使徒言行録の1章ですが、復活の主が弟子たちに現れて言われました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、私の証人となる」(8節)。つまり、イスラエル十二部族を意味する「ユダヤとサマリアの全土」で証人となるのが十二使徒です。

「地の果てに至るまで」の証人は、使徒言行録後半の、異邦人への使徒パウロが中心となります。そこで、マタイ福音書では、主イエスは十二使徒に「異邦人の方に行くな」と言われましたが、これは意地悪ではないのです(10:5)。イスラエル人から始まって異邦人へという順序があったのです。救いの準備は、イスラエル民族の歴史の中でなされました。マタイ福音書は、「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」から書き始めて、「全ての国民を私の弟子とせよ」という主イエスの宣教命令で終わります。

III 十二使徒の使命

イエス様が十二使徒をお選びになった目的が、ルカ福音書には同じ段落にハッキリ書いてないので、ルカが資料にしたと思われるマルコ福音書から補足しますと、こうです。「彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった。」(3章14.15節)

「派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるため」という目的は、マタイ福音書がいちばん詳しく書いています。「十二人を選ぶ」という段落に続けて「十二人を派遣する」という段落に詳しく書いています。一つは先ほども言いました、イスラエル十二部族にまず宣教するためです(10:5.6)。宣教の言葉は「天の国は近づいた」ですが、イスラエル十二部族は、「天国が近づいた」ことのあるしを、旧約聖書からメシア到来のあるしによって知ります。メシア到来のあるしは、病人の癒しや死人の生き返り、思い皮膚病の清め、悪魔払いですが、すでにイエスがなさっていたものです。弟子たちはその権能を授けられて同じことをせよと命じられました(10:7.8)。

宣教と愛のわざ、これが十二使徒の使命です。ルカはこれを、十二使徒をお選びになった次の段落で述べています。マタイのように「派遣」ではなく、「イエスは彼らと一緒に」です(6:17)。イエス様が十二使徒をお選びになった目的が、ルカ福音書には同じ段落にハッキリ書いてないと先ほど言いましたのは、次の段落をよく読めば書いてあるからです。イエスと使徒たちが一緒に山から下りて平らな所にお立ちになりますと、「大勢の弟子とおびたしい民衆が、ユダヤ全土とエルサレムから、また、ティルスやシドンの海岸地方から、イエスの教えを聞くため、また病気をいやしていただくために来ていた。汚れた霊に悩まされていた人々もいやしていただいた」のです(6:17.18)。

ティルスやシドンは厳密に言えば外国の町ですから異邦人への伝道も含まれているように思えますが、ユダヤ人はイスラエル周辺に散らされていました。十二使徒の使命は、イエスの教えを語るため、病気をいやすためです。宣教と愛のわざです。この内容は異邦人伝道でも同じです。

「天国は近づいた」という宣教は、キリストの愛が迫って来ることですから、受け入れれば救いと永遠の命、拒めば永遠の罰と死が確定します。天国か地獄か、平安か恐怖かです。神の最高の愛はキリストを与えることですから、これを拒むこと以上に大きな罪はないのです。このことを受難週の今週は瞑想しましょう。